

リレー連載・世界へのチャレンジ(2)

世界選手権への道(下) 杉山隆司

1976年夏、杉山隆司は念願のスコットランドでの世界選手権に出場する。それは日本のオリエンテーリングが初めて世界に挑戦した夏であった。

1976年2月、ヨーロッパ大陸外では初めての開催となるWOC76の競技センターが、スコットランドのアピモアと正式発表された。イギリス最大の国際大会であるJK杯に合わせて、公式トレーニング・キャンプが開催され、ヨーロッパの強豪もナショナル・チームを送り込んで来て、一気にWOCムードが高まった。

アピモアへ、ビルドアップの夏

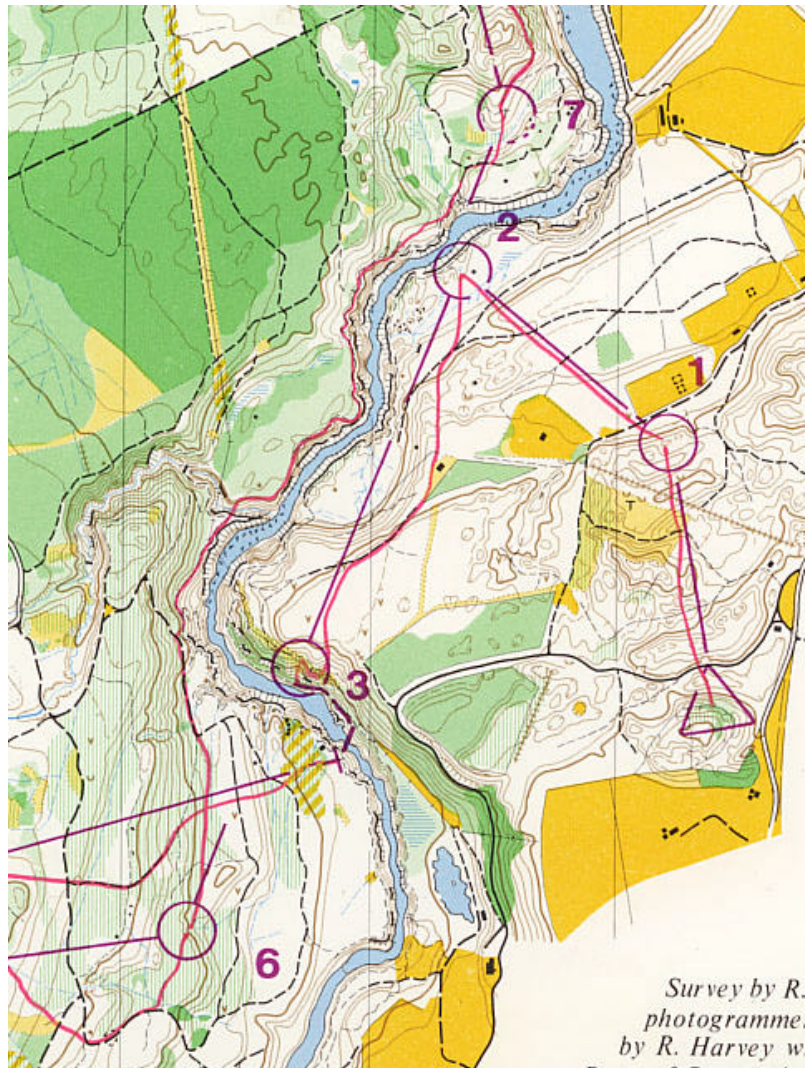
春の公式キャンプは、冬のトレーニングを受けて、WOCを照準としたビルドアップをスタートする重要なイベントだ。それなのに、私は何とその初日に岩で膝を強打し、生まれて初めて、走れないほどの怪我をしてしまった。幸い骨には異常は無かったが、公式キャンプは全て無駄に成った。その上、JK最終日には食中毒で再び病院に担ぎ込まれるオマケ付き。正直、落ち込んだ。しかし、この時期に怪我や体調コントロールの重要性を認識できたのは、実は正解だったかも知れない。シーズン初めの早過ぎるピーキングを心配する必要も無かったし。

散々の春シーズンを乗り切り、いよいよ大学も夏休み、待望の長期遠征だ。初めてのフィンランドを皮切りに、スウェーデン、ノルウェーと廻り、フィンランドへ戻って、最後はノルウェーで調整という2ヶ月に渡る流浪のひとり遠征だ。勿論、大会では仲間達と一緒にだが、精神的強さを磨く為にはひとりで行動しなければダメだというのが私の信条だ。初めてのM21Eクラス、最も優れた選手が集まっているフィールドでなければ決して得られないものがある。ちょ

っとのミスが恥ずかしい惨めな結果として曝け出される。そのプレッシャーの中でしか培われない集中力、センス、スピードを磨くのだ。もっと速く、もっと強く、とストレッチし続けることで徐々にピークを高めていく。

そのピークを感じ始めたのはオーリングン、毎日順位を上げ、4日目ついに12位に入った。更に翌週ノルウェーでのソーランス・ガロッペン、短めのコースで

8日間に6レース、スピードとセンスをフルに稼動させたリスクと背中合わせの高速レースが快感になった。エーギル・ヨハンセン(WOC76優勝)が楽々優勝したが、彼に対しキロあたり1分差以内のスピードを体感し、WOCへの確かな手応えを感じた。<WOCの標準優勝タイムは90分、距離は約15km、私の目標タイムは優勝者とキロあたり1分差以内で105分と想定していたのだ>



WOC76の地図。6・7が著者のいうキラレグだ。この森は、99年世界選手権のトレーニングでも使われた。

その後、フィンランド、ノルウェーの友達宅に居候してトレーニングを積み、9月の訪れと共にイギリスに戻った。仕上げは、母校ACの奨学金を募る為の一輪車押しリレーだ。南ウェールズのカーディフからスコットランドのエジンバラまで、10人で400マイルを64時間で走破、文字通り走ってスコットランド入りした。無茶だと思われるかも知れないが、唯無心に走ることでスタミナが付き、レースに対する意欲も高められ、充実した気持ちでアピモアに乗り込んだ。

ダーナウェイの夢

いよいよWOC76公式プログラムがスタート、いきなりモデル・コースのテレインのバリエーションに驚いた。そして、個人戦前日に発表された会場は、ダーナウェイ。一部地形がスライドで紹介され、スコットランド特有の一見北極的なテレインのみならず、イギリス南部を思わせる中世の落葉樹林や、大陸並みの深い渓谷まで有る。そして、その渓谷に今大会の為に特設された吊り橋に、発表会場はどよめいた。この渓谷に絡むルートチョイスが有るに違いない、そこでのミスは命取りに成るぞ、と真っ先に思った。渓谷以外の高低差はそれ程無さそうだから、トリッキーな読図が要求されるレッグが多いはずだ。自分なりにコースを想定し、戦略を決めた。

- 1) キラー・ルートチョイス・レッグを真っ先に見極める
- 2) 高低差の大きい前半は、ペース重視の安全ナビ
- 3) 中盤は、スピードを重視したルート選択
- 4) 後半は、スピードが落ちてでも最短ルートの緻密ナビ
- 5) スタミナを信じ、下手な体力温存はしない

実際のレースでは、かなり自分の戦略に忠実に走れたと思う。キラー・レッグが6から7へのレッグである事は、1番コントロールしながら読み取れたし、そのルートチョイスは崖沿いの小道がベストだと、2番へのルート上で判断し、そのチョイス通りのルートをスピードに乗って走れた。

ただ、中盤でのルートは安全過ぎだった。また、後半のスタミナ切れは緻密ナビで小さなミスの連発を誘発した。中盤はもっとリスクを取って直線的に責め、逆に後半はできるだけナビを単純化して、走り続けることに専念すべきだった。

結果は113分06秒で26位(今でも日本歴代最高とか)、優勝のイーギルとは22分差であった。目標の20位、105分には届かなかったが、その20位にはイギリスのエース、ジェフ・ペックが106分入り、自分の目標は到達可能だと再確認した。他のイギリス代表には勝てたので、少なくともお世話に成った仲間達への恩返しはできたと思った。

ずっと夢見続けた世界選手権、レースそのものはあっという間、夢幻しの如く成りだった。ひとり参加の私はリレーでの出走は許可されず、歴代ベストの6位に入ったイギリス・チームの興奮も何か空しかった。よし、絶対また来るぞ、しかも今度は日本チームを引き連れて、トリレーのモデル・コースをひとり走りながら心に誓った。



76年世界選手権で、フィンニッシュを走る著者

初の日本チーム、WOC78へ

1977年夏、オックスフォード卒業、帰国前最後の大陸遠征の旅、前年にも勝る好成績を叩き出した。特にスイス5日間大会では強豪ひしめくH21Eクラスで総合25位、

これにはWOC76での26位よりも興奮した。何しろ5日間の通算だ、しかも上位40位まで私以外は全て5大国のエリートばかり。翌年のWOC78、20位以内が確実に見えたと思った。

そして、帰国。いよいよ、日本チーム結成へ向けての胎動が始まる。当時日本では、毎年オーリンゲンへ視察選手団が派遣されていて、競技としてのオリエンテーリングが本格的に普及し始めていた。熱心なオリエンティア達に囲まれ、一緒に走り、熱く語るうちに、伴に世界に挑戦しようという気運が盛り上がるのに時間はかからなかった。

しかし、現実には厳しかった。資金も選手養成プログラムも何も無かった。まずはスクウォッドを組織化した。WOC出場の資質と野望を持つ者同志が切磋琢磨する場だ。次に、トレーニング。合宿を企画したり、テクニックの本を書いたり、私なりに努力はしたが、ノルウェーのWOC78、フィンランドのWOC79を目指すには、日本でのトレーニングだけでは絶望的だった。やはり事前の欧州遠征が不可欠だ。時間の問題も然る事ながら、資金が最大のネックと成った。国、協会からの補助はゼロ。結局、時間とお金とやる気のコミットができる人間が、自費でWOCを目指すしかなかった。

何とか公式キャンプの費用だけでも捻出しようと、私がイギリス時代に作った地図の販売を考えた。すると、南部地区協会長のピーター・ロブソン氏、ウェールズ地区選手権大会長の恩師マックルホース先生から、数百枚の地図を、また、WOC76のマッパー、ロビンとスー・ハーベイも、WOC76の成績表付き地図セットを提供してくれた。日本チームのWOC78公式キャンプは、実はこうした好意にサポートされていたのである。

こうしてWOC78に初参加した日本チームは、貧乏でユニフォームすら無かったが、当時のほぼベスト・チーム(杉山、小山、高尾、山岸)で、リレーで20ヶ国中14位に入るデビューを飾り、その後には明るい希望を繋げた。私自身はと言えば、個人戦前半は快調に飛ばしたが、キャンプ中に痛めた弱点の膝にスタミナ不足も加わり、結局40位に終わった。<イギリス時代のライバル、マイク・ダウンとクリス・ハーストが19位、20位に入っていたのが悔しかった>リレー第一走でも、密かに6位を狙って

いたが、最後で抜かれて結局 9 位だった。ノルウェーの湿地の多いトレインは走り慣れていないとかなり体力を消耗する。以前は得意のトレインだったのに、たった一年で思うように走れなく成っていた。思えば無理して参加した 7 月のスイス 5 日間大会でも以前のスピードもセンスも取り戻せず、8 月の調整では日本の夏に苦しみ、改めて日本からの挑戦の難しさを痛感した。

ニッポン・チャレンジ

オリンピックへの配慮で奇数年開催切り替えの為、二年連続と成った WOC79 へ向けても、日本の環境は期待したほど好転しなかった。私自身もフルタイムの社会人の身で、WOC に参加するだけでも精一杯、夏の遠征は無理だった。そこで考えた苦肉の WOC79 対策は、スピードを諦め、スタミナ強化にフォーカスし、センスは現地入りしてから取り戻す作戦。週末は主に丹沢で、夏休みには利尻島、礼文島で、ゆっくり走り続けた。また、WOC まで日本でのレースには殆ど出ず、昔の良いイメージのみを頭に描き続けた。



WOC79 (フィンランド) を走る著者

WOC79 開催国フィンランドの地形は高低差も少なく、確かに本来はスピード勝負であるが、ステディなペースで走り続ける事に集中した。それが功を奏し、個人戦では 28 位に入り、まだまだ 20 位以内は狙える

と想ったりもした。しかし、リレーでは日本は完走チーム中最下位。私以外フィンランドでのレース経験は無く、現地での付け焼刃技術トレーニングが WOC に通用するはずも無い。何れにせよ、自分自身の事で精一杯ではコーチングもままならぬ。日本が遠く感じた。

その後、自分のオリエンテーリングはそのまま日本で続けてももう伸びない、と思いつつ悩むようになった。更に、会社での新規プロジェクト立ち上げで深夜残業が続き、走り続ける意欲を維持できなくなった。自ずと WOC81 は断念。あれ程熱中していたオリエンテーリングそのものへの情熱も、急速に冷めていった。スポーツは儼い、ピーク時の密度が濃ければ儼い程、その儼さは空しい。しかし、身も心も捧げてチャレンジした熱き日々の鮮烈な記憶は、いつまでも心のどこかに残り火と成って燃え続けている気がする。

その火が消えてしまう前に、2005 年へ向けてニッポン・チャレンジを担う若きオリエンティアに伝えたい。世界を目指すなら、少なくとも二年、ヨーロッパに住んで本場のオリエンテーリングを 120% 体験すること。できれば北欧、中でもノルウェーには最強のオリエンティアを造る全てが有る！短い人生、トップ・フォームで居られる時期は更に短い。その時このコミットメントを持てるかどうか、それが世界への鍵だ。四半世紀を経た、しかも所詮日本からの挑戦には脱落してしまった私の助言など意味無いかも知れないが、もし今私が 3 年後に WOC 上位を狙える位置に居たら、迷わずヨーロッパへ向かっているだろう。思えば帰国前の 1977 年夏が私のピークだった。あの時、あと二年ヨーロッパに居られたらどこまで行けただろう、と時々思うことがある。現代社会、二、三年スポーツに賭けたって飢え死にする訳じゃない、人生の落伍者になる訳でもない。よし俺が、というオリエンティアが出て来ることを期待して、次の執筆者にバトンタッチすることにしよう。

最後に、一つだけ心残りな事を告白したい。私の全盛期に、村越と一緒に WOC リレーに出てみたかった。私の不甲斐無さの為に、折角の私の経験も後進に上手くパト

ンタッチできなかった。せめてこの記事を書きかけに、WOC2005 へ向けて、日本のオリエンテーリングに今からでも何か貢献できれば幸いである。

(本連載は、杉山とともにノルウェー、フィンランドと世界選手権を経験し、10 年以上の長きに渡り世界選手権に挑戦した、山岸が引き継いでレポートします)